

②1 ぼんぼんおのなまのりえ(社原)

あるところにな ぼんぼんおの兄弟がめつてたよ。ところがうしたところから 兄の方がな 重い病氣にかかって  
なまのりえをたまたまして。そこで兄をたての弟のぼんぼんおは たらこを配って、よなごころはたまたましてな  
おして思っていたところが、やまのいもを食へさせたらええときいたんで、さうそく山入ってほつてきて、ええと  
ころばかり食へさせたらええな。なんへんもそないして食へさせておつたら、それがきいたんか、兄のぼんぼんおは  
やうと重い病氣がなつたそつな。

病氣がなあるよ、兄のぼんぼんおは、おれの病氣のめいだ、弟はやまのいものうまごころばかり食へさせたく  
ねつしたが、ひひひつしたらええよ、うまごころがあつて、あつはねを食へしたまにたがいない。いったい、  
なに食へてやつたものか、みだごまをせ。」

よ、思つてな、よ、ねむひつてた弟をひひひつて、殺してしまたせつて。ひひごころをすめる兄をたまたま、鬼み  
たいなちつちも。

それからな、その兄のほうは、弟の腹を割ってこしらえてみたをやって、そしたら弟の腹のなかから出てきたまんは、もうしまじりしまじりな、やまのうまのわけじりじりのまのうまのほうは、かじやったそうだな。それをみた鬼みたいな兄のほうは、

「ああ、そやったのか。お前はおれの病気をなおしてくれようとして、こんなまじりまんをたたく、しんぼつしていったんか。そやのうしたじりて、お前を殺したりして、すまんすまん。」

ちゅうしてな、なみだを、ぼくしあせましたんじな。おんねごな、なまあせまじりま、心のせれじり死んだ弟は、もうかえってきせせんわ。

ああ、そんなじりがあつてからぞ。兄のほうは

「ぼくちゃん(座)かけた、おんねじり、おんねじり。」

じり、目をほへちしお思いを、めい、夜のおこなへちしおつじり、いせ、まじりおのなまじり、きいたじりがあせまが。ちゅうごつめい。そなごじりなごまのちゅうじり、おんねじりがおんねじりな。

